

態度構造と変容 (I)

—一貫性理論と総和理論に関する概観—

田 中 国 夫

目 次

はじめに

1. 一貫性理論

- 1-1 Heider のバランス理論
- 1-2 Newcomb の A-B-Xモデル
- 1-3 Festinger の認知的不協和理論
- 1-4 Abelson と Rosenberg
- 1-5 Rosenberg の感情—認知の一貫性理論
- 1-6 McGuire の論理—感情の一貫性理論
- 1-7 Osgood と Tannenbaum の適合性の理論
- 1-8 Rokeach の信念適合性の理論

2. 総和理論

- 2-1 Fishbein の総和理論

3. 一貫性理論と総和理論の相剋

おわりに

参考文献

(注) 1-5 Rosenberg の感情—認知の一貫性理論まで本号所載。以下は次号掲載の予定。

はじめに

「一貫性原理についての理論的な概念は、長い過去と短い歴史を持つ。」とは、かの有名な Ebbinghaus の言葉を McGuire⁵³⁾ がもじったものである。かつては論理的な人間という中世の概念や経済学における合理的な人間という概念から現在においてはバランスの概念にいたるまで、一貫性の概念は包括的な意味を含蓄してきた。合理的な人間という概念は、科学の初期の時代においては、人間行動を説明する嚮導仮定として非常に

人気があった。その後、合理的な人間という概念は、行動科学の中で長い間日の目を見なかった。しかしながら現在では、態度構造論の文脈の中で再び脚光を浴び、一貫性の概念のルネッサンスと呼んでも過言ではないだろう。

現在の一貫性原理についての理論的基盤は、Heider³⁴⁾ の「バランスに向う傾向」から出発している。Heider の理論について最も完全な研究は、「対人関係の心理学」と題する本に見られる。(Heider,³⁵⁾ そして Heider の理論は、Carwright と Harary¹⁵⁾ の「バランス構造」や Abelson と Rosenberg²⁾ の「バランスマトリックス」に受け継がれている。Newcomb⁵⁵⁾ は、異なった形にバランス理論を適用し、「シンメトリーに向う緊張」という仮説を提出した。一方、Osgood と Tannenbaum⁶³⁾ は、「適合を増大させる方向」という仮定に基づき、少々異なった文脈で理論化を行なった。同様の傾向は Rokeach⁷⁰⁾ にも見られる。また最も有名な理論として Festinger²¹⁾ による「認知的不協和」理論がある。

種々の文脈や用語によって使用されている一貫性の概念を代表的なものだけ整理してみると表1のようになる。

表1 一貫性 (consistency) の概念

| | 一貫性 (consistency) | 非一貫性 (inconsistency) |
|------------------------|----------------------|-------------------------|
| Heider | バランス (balance) | インバランス (imbalance) |
| Newcomb | シンメトリー (symmetry) | アシンメトリー (asymmetry) |
| Osgood と Tannenbaum | 適合 (congruity) | 不適合 (incongruity) |
| Festinger | 協和 (consonance) | 不協和 (dissonance) |

(注) 本論文は広島大学教育学部大学院修士課程学生藤原武弘 (本学昭和44年卒) との共同研究によるものである。

以上のように概念化においては異なっているけれども、基本的な考え方は同じである。すなわち人間は、対人関係間、個々の認知間あるいは感情、信念、行動間において、内部的な非一貫性を最少にするような仕方で行動する。従って不一致、非一貫性が生じた際には、それは一種の心理的な緊張状態である。そうした緊張は、人間にとって不安定な状態であるので、緊張緩和に向って作用が起る。その結果が認知的変化であり、別の言葉で述べるなら態度変容である。このような考え方の背景を辿るならば、生理学者 Cannon, W.B. がとなえた「ホメオスタシス (Homeostasis)」という概念に到達する。

一貫性原理に基づく理論は、態度構造研究においては、認知理論という枠組の中で論じられていることが多い。しかしながら一体一貫性理論が、態度理論の文脈の中で、どのような位置を占めているのか、ということは必ずしも明確ではない。特にわが国においてはその感が強い。たとえば、鮑戸⁴⁾は、態度構造研究における系譜を二つに分け、「態度構造論」と「態度成分論」という対比で把握している。前者は、Thurstone⁹⁾¹⁾、Carlson¹²⁾、Ferguson¹⁸⁾、Eysenck¹⁷⁾、Sanai⁷⁾¹⁾、わが国では、田中⁸⁾⁷⁾、藤野・岡路・福島³⁰⁾、河村・四方⁴⁾¹⁾などの研究によって代表される立場であり、後者は、Krech と Crutchfield^{45, 46)}、Smith⁸⁾⁴⁾、Katz と Stotland⁴⁰⁾、Rosenberg⁷⁾⁵⁾などによって代表される立場である。鮑戸は特に認知理論との関連を「態度成分論」でとらえようとしている。鮑戸の言葉⁴⁾を借りるなら、「態度成分論」における研究の関心は、「a priori に設定された、いくつかの（一般に、二つ又は三つの）成分により、態度の構造なるものを近似的に構成し、それらの成分間の一致、不一致、不一致の程度と変化の可能性、変化の様相などについて考察しよう」とするところにある (P. 269)。しかしながら彼は、注において一連のバランス理論、認知理論の流れを、「態度成分論」における志向とは区別したい、と述べている。なぜなら、認知的「要素」や要素間の「関係」が互いに均衡の状態にあるかないか、その時どう変化して均衡を達成しようとするのか、といった点に認知理論は焦点を置くので、どのような成分を設定すべき

か、その結果設定された特定の成分間の均衡は？といった「態度成分論」の関心は副次的なものであるからである。このように認知理論が、態度理論の文脈の中で占める位置は比較的あいまいである。従って筆者らは、この一連の認知理論を、一貫性という概念で包括的に把握し、一方では、態度変容のダイナミックスを説明する基本的な原理として一貫性を仮定しつつ以下論を進めよう。

〔1〕一貫性理論

1-1 Heider のバランス理論

バランス理論の歴史は Heider^{34) 35)} ともにも始まる。いわゆる常識心理学から出発した Heider は、「対人関係の心理学」により、彼の理論を集大成している。(Heider, ³⁵⁾) この本では、タイトルが意味するよりも、むしろより広い人間の知覚や思考といった研究をも含んでいる。Heider のバランス理論は、一種の社会的知覚の理論である。しかしながら、知覚の社会的な決定要素に関心を持つ多くの社会的知覚論とは異なり、Heider は知覚それ自体を扱う。そして社会的知覚は、Gestalt-like 構造原理、Gestalt-like dynamics に従うのである。Heider は、人間と人間との関係あるいは人間と実体との関係が、個人によって認知的に経験される様式に関心を持った。Heider は関係を感情 (sentiment) 関係と単位 (unit) 関係とに分類する。感情関係とは、好意、賞賛、賛成、愛すること等を含む態度的、評価の関係である。一方、単位関係とは、人と対象 (実体) や二つの対象が互いに結びつき、一つの全体として知覚された単位に帰着する。たとえば類似、近親、因果関係、会員、所有などがその例である。感情関係における好き、好意的などは肯定的 (positive)、嫌い、非好意的などは否定的 (negative) と考えられる。単位関係では、それが存在すれば肯定的とし、存在しなければ否定的とする。さらに Heider は、シンボリック・ロジックの表示法を用いることにより、彼のシステムを記号で表わす。人は P、もう一人の人は O、実体は X という記号で表わされる。肯定的な感情関係は L、否定的な感情関係は nL、肯定的な単位関係は U、否定的な単位関係は nU という記号で示される。このように Heider の研究の目的は、

P, O, X間の関係がPの生活空間において、どのように構成されているのか、またこれらの関係が経験される状態において、循環的、系統的傾向が存在するかどうかを見出すことであった。

Heider は一般的には バランスをどのように定義するのであろうか？しかし Heider 自身は、バランス (balance), インバランス (inbalance) といった用語については、ゲシュタルト的な枠組の中で述べているけれど、厳密な意味での定義は行っていない。ただ Heider³⁵⁾ はつぎのように叙述している。「バランスの状態とは、状況を含む実体や実体に関する感情が互いに緊張なく調和している状態を意味する。」(P. 180)

Heider は、同質な感情関係をバランスとして考察している。もしすべての特別な感情(賞賛, 好み, 賛成など)が評価において一致しているならば、あるいは、同じダイナミックな特性を持っているならば、その時われわれは、同質の感情関係にある。もし PLO あるいは PnLO が L のすべての意味を持ったならば、P と O との関係はバランスである。ただし L のすべての意味を持つとは、異なったダイナミック関係が論理的には含まれていないということである。というのは、「P が O を好む」ということは、「P は O を賞賛する」ということを意味しない。ある側面では肯定的であっても、他の側面では否定的な場合がありうるからである。たとえば、義務と好みとの間の葛藤などが往々にしてある。そこで、認知的再体制化の手段(言いわけ, 合理化)によって、異なったダイナミック関係を互いに一致させようとする傾向が生じる。要するに、人間には、すべての感情関係を互いに一致するようにしむける傾向がある。たとえば、賞賛されている人を愛し、愛されている人を賞賛するといった具合に。よく知られているハロー現象とか、全て良いか、全て悪いか、という他人についての判断は、このように同質性の感情関係に向う傾向から生じる。Insko³⁶⁾

(P. 162) は、同質性の感情関係に向う傾向があると仮定する Heider の概念化と最大の単純化に向う傾向があると仮定する Osgood と Tannenbaun³⁷⁾ の概念化との類似性を指摘している。

Heider³⁴⁾ は、人間と人間との特別なタイプの

関係、あるいは、人間と実体との間の特別な関係を含むものとして、バランスを吟味している。彼はつぎの四つに分類している。

1. 人間と人間でないもの (P, X)
2. 二人の人間 (P, O)
3. 二人の人間と人間でないもの (P, O, X)
4. 三人の人間 (P, O, Q)

1. P と X

P と X とを含む二者関係では、もし感情関係と単位関係の両方共が肯定的であるか、あるいは、否定的であるならば、バランスが存在する。記号で表わすならば、もし PLX+PUX, PnLX + PnUX のうちのどちらかが得られたならば、そのシステムはバランスである。たとえば、もし P が X を賞賛しており、X を所有しているならば、そのシステムはバランスである。

2. P と O

同様に、P と O とを含む二者関係は、もし感情関係と単位関係の両方が同じサインを持っているならば、バランスの状態である。加えて、もし PLO と OLP の両方が得られたならば、その二者関係はバランスである。もし P が O に対して肯定的な感情を持っており、O がその感情にこたえないならば、その二者関係はバランスではない。

ここで注意すべきこととは、PUO はシンメトリカル (symmetrical) な関係、つまり PUO は OUP を含むということである。しかし、PLO は OLP を含まないのでノンシンメトリカル (nonsymmetrical) な関係である。もし PLO と OLP あるいは PnLO と OnLP が同時に存在するならば、バランスの状態と言える。P と O との間の attraction あるいは嫌悪は、そこで二面交通の事柄であり、その関係はシンメトリカルな調和の状態にある。PLO は、論理的にはノンシンメトリカルな関係であるが、心理的にはシンメトリカルになる傾向がある。たとえば、P は自分が尊敬している人 O によって愛されることを望み、P は彼を軽蔑する人を嫌う。このような心理的にシンメトリーに向う傾向から、この理論はつぎのようなことを意味する。つまり、互いに類似していると知覚している人々はお互いに魅力を感じている。しかしながら、異質なものが引き合うという諺はどのように説明されるのであろうか？

Heider³⁵⁾によると、そのような補足作用は、共通の目的、目標を達成することを容易にし、それに含まれた個人は、ある意味では、同類であるかもしれない、と述べている。

「類似性と感情との間の上の関係についての明らかな例外、つまり、二人の人間がお互いに補い合うので二人の人間が互いに適合するならば、相違点が好意と結合に導くことがありうるということは、少なくともある場合には、その関係の検証となるかもしれない。多くのものは、類似の実体、相違の実体や補足的な実体についての指示のための基準で定まる。二つの明らかに異なった実体が、共通の目標に向うならば、ある意味では、それらは類似なものと考えられるかもしれない。これはある種の補足的な関係であって、男と女というように「反対のものが引き合う」というような例で示される。そこでこの分析の観点から見ると、好きになることは相違の結果生じるという事実は、考慮中のバランスの場合における例外とは必ずしもならない。というのは、明らかな相違が実際には、類似性や例のような目的の類似性によって取って変わられるかもしれないからである。」(Heider³⁵⁾, PP. 186-187)

肯定的な感情関係の形成は、相互作用と接近の結果生じる、ということはこの理論はまた意味している。しかし、「なれすぎると侮りを招く、親しき仲にも垣をせよ」という矛盾的な諺にわれわれは出会う。ただ二人の態度間にそれほどの相違がないならば、肯定的な感情関係は相互作用によって形成されるであろう、と Heider³⁵⁾ は述べる。「同じような態度を持っているならば、接近は肯定的な感情関係の程度を増加させるであろう。態度がわずかに相違しているならば、相互に同一化が起こるかもしれないし、それとともに親しさも増すかもしれない。強い相違があるならば敵意が増加するかもしれない。」(P. 190)

3. PとOとX

三者関係の場合について Heider³⁵⁾ は、つぎのように述べる。

「三つの関係がすべて肯定的であるか、あるいは二つの関係が否定的で、一つが肯定的である時には、三者関係はバランスの状態にある。」(P. 202)

Zajonc⁸³⁾ は、三者関係をつぎのように図示している。

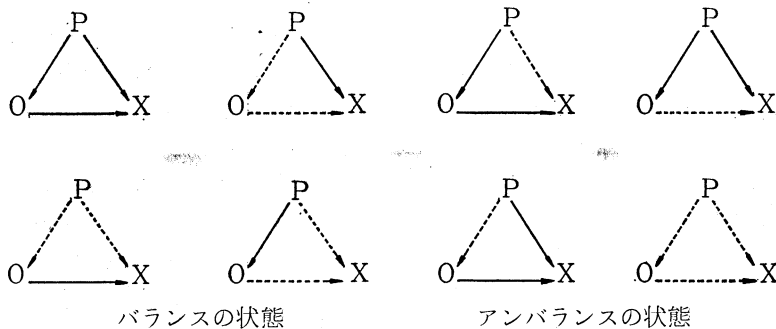


図1 Heider のバランスの定義によるバランスの状態とアンバランスの状態の例。直線は肯定的な関係、点線は否定的な関係を表わす。

たとえば、PがOとXを好み、OがXを好んでいるとPが知覚したならば、あるいは、PがOを如み、Xを嫌っており、OがXを嫌っていると知覚したならば、そのシステムはバランスの状態にあるといえる。感情関係だけではなく、単位関係を含むバランスとインバランスの例としては、好きな本の著者を好きになること、あるいは、好きな本の著者が嫌いになることなどがあげられる。

4. PとOとQ

多くの可能な場合のうちで、(PLO)+(OLQ)+ (PLQ)についてだけ考えてみる。たとえば、Pは、彼の二人の友人が互いに好きになることを望む。この例は、L関係についての心理的移行性を示している。しかしながら、恋の三角関係についてはどうなるのであろうか？たとえば、Pと彼の友人Qの両方共が同じ少女を好きになった場合

である。ここでは三者は全部肯定的な関係である。けれどもこのシステムは、周知のようにアンバランスである。Heider³⁴⁾ はこれについてつぎのように述べている。

「PはPの女友達であるOが、Pの男友達であるQに好意を寄せることを望んではいない。なぜなら、この場合ではOLQはOnLPを含み、そしてOnLPはPLOと葛藤状態になるからである。恨みや競争心と同じような嫉妬が、単位関係の間のもつれから生じている。」

このようにPとOを含む二者関係が、潜在的にはインバランスの状態にあるので、このシステムはバランスではない。

Heider³⁵⁾ によると、三つの否定的な関係の場合には「何かどっちつかずの」状態にある。Heiderは、三つの否定的な関係のシステム(PがOとXとを嫌い、そしてOがXを嫌っていると知覚している)がバランスであるか、否かは述べていない。ただ彼はつぎのように述べている。

「Xに対する共通の否定的な態度が、PとOとの間の類似性の感情をたやすくひき起こすかもしれない。その結果として起こってくる単位(PはOに類似している)それ自身は、肯定的な関係であり、われわれが見てきたように、その単位は2番目の肯定的な関係(PLO)を生ずる傾向がある。」(P. 206)

Heider バランス理論の基本的仮設とは、インバランスな状態は緊張を起こさせるのでバランス回復のための力がひき起こされる、ということである。バランスに向う変化は、いくつかの形をとりうる。Heiderは、こうした変化を、一つの肯定的な感情関係、一つの肯定的な単位関係、そして一つの否定的な感情関係におけるシステムに関して述べている。(PはOが好きであり、OはXという意見を持っている。OはXについて賛成ではない。(バランスは、たとえばPはOを嫌いになるか、あるいは、Xに賛成するか、のどちらかの感情関係を変えることによって回復される。同様にバランスは、単位関係を変化することによっても得られる。たとえば、Oは本当にはXという意見を持っていないのだと思い始めるわけである。これはある意味では misperception 理論の一般化は、Cartwright と Harary¹⁵⁾, Harary.

Norman と Cartwright³³⁾ によって、直線グラフという数学理論からの概念を用いることにより行なわれている。特に彼らは、個人の認知構造つまり主観的なシステムよりもむしろ、コミュニケーションネットワーク、勢力体系、ソシオメトリック構造といったような客観的なシステムに関心を向ける。

Heider 理論の検証論文は非常に多い。バランスとインバランス一般について焦点を合わせた論文を拾ってみると、Jordan³⁹⁾, Morrissitte⁵⁴⁾, Price, Harburg と Newcomb⁶⁶⁾, Pirce, Harburg と McLeod⁶⁵⁾, Sampson と Insko⁸⁰⁾ などがある。

1-2 Newcomb の A-B-X モデル

Newcomb^{55) 56) 57) 58)} は、Heider のバランス理論をコミュニケーション行動や対人的方向づけ (interpersonal orientation) に適用することにより、相互作用理論の枠組内で理論的展開をはかった。とりわけ相互作用の基本的な型「人が他の人とどのように知己の間柄になっていくのか」という問題がその出発点となる。具体的には、ある人(A)が他の人(B)に何か(X)について情報を相互伝達する過程を考える。AとB、AとX、BとXの相互依存的な関係を構成する過程をA-B-Xシステム、あるいは、方向づけのシステム(system of orientation) と考える。このように方向づけのシステムは、B(コミュニケーター)とX(方向づけの対象)とAが判断したXとAに対するBの方向づけよりなる。そしてこのAのBに対する方向づけとAのXに対する方向づけが相互に依存的な関係にある場合を同時的方向づけ(co-orientation)と呼ぶ。A、B、Xの関係を図式的に表現すると図2のようになる。図を一見すると理解できるように Heider のバランスモデルのP、OをA、Bで置き換えたもののようである。

しかしながら、Newcomb の場合には、人間と人間とのコミュニケーションの相互作用過程が重要な要素となる。従って、Heider のように、ある一人の人間の認知構造内だけにとどまらず、ある程度「客観的な」システムとしての意味を含ませている。Newcomb⁵⁵⁾ はつぎのように述べる。

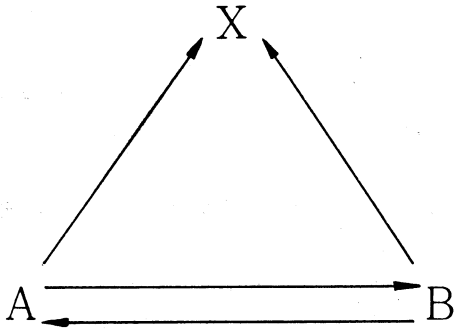


図 2

「従ってA-B-Xは、一つのシステムを構成していると考えられる。すなわち、AとB、AとX、BとXとの間の定義できる関係はすべて相互依存的な関係と考えられる。ある目的に関して言えば、システムはAあるいはBの生活空間内の現象的なシステムと考えられるし、他の目的に関して言えば、Aの行動やBの行動の観察から推論できるように、あらゆる可能な関係を含んでいる、客観的なシステムとしてみなされるかもしれない。」(P. 393)

Newcomb は、「シンメトリーに向う緊張」(strain toward symmetry) を仮定する。つまり、AとBとのXに対する態度は互いに一致へ向う傾向があり、両者の間に食い違いがある時には、それらが一致するようにAとBとの間にコミュニケーション活動が起こるといふものである。たとえば、Xに関して、A、B間にシンメトリーが欠如しており、ある個体Aに方向づけの要求のある場合には、Aのとりうる行動の可能として、Newcomb⁵⁵⁾ はつぎのようなものをあげている。

1. Xについてシンメトリーに到達しようと努める。
 - (a) 自分の方向づけに向ってBを変化させる。
 - (b) 自分の方向づけをBに向うように変化させる。
 - (c) Bの方向づけを認知的に歪曲させる。
2. そのシステムの他の部分に変化を誘導する。
 - (a) AがBに対して持っている魅力を変える。
 - (b) Bへの魅力の判断を変える。

- (c) Aの自分自身に対する魅力の評価を変える。
- (d) BのB自身の評価についての判断を変える。

3. 変化なしにそのシンメトリーでない状態に耐える。

Newcomb⁵⁶⁾ は、対人的な魅力が類似性を増加させるという研究を発表している。互いに魅力を感じている二人の間は、種々の物の考え方や他のグループの成員についての魅力の感じ方など多くの事柄について一致の程度が高くなる傾向があることを示している。

Newcomb⁵⁷⁾ は、彼の理論の中核をなす構成概念の定義を行なっている。方向づけ (orientation) という概念は、少なくとも彼の理論を理解する上の手がかりとなるものである。「方向づけ」を Newcomb⁵⁷⁾ は、つぎのように定義する。

「概念的には、方向づけとは、有機体の心理過程のすでに存在している組織であり、それは弁別できる対象あるいは対象の階層に関して、後の行動に影響を与えるものである、と定義される。」(P. 389)

第一に方向づけは、対象の種類によって二つに分類される。コミュニケーターに向う方向づけは魅力 (attraction) と呼ばれ、コミュニケーションの対象に向う方向づけを態度 (attitude) と呼ぶ。第二に方向づけは、情動的な (cathectic) 側面と認知的な (cognitive) 側面とによって特徴づけられる。「前者 (情動的な方向づけ) は接近回避傾向を示す。情動的方向づけは、サインと強度について概念的属性を持っている。」(P. 391)

「認知的な方向づけは、方向づけの対象の中に、認知されたものとしての属性の秩序や構造を示す。」(P. 391) つまり、方向づけの認知的側面は、方向づけの対象の属性や特性についての非評価的知覚を示している。

方向づけのシステムはBとXに対するAの方向づけとAによって判断されたAとXに対するBの方向づけとで成る。これらの方向づけ全体は、システムを構成していると考えられる。なぜなら、ある仮設的な条件下においては、方向づけのうちのある一つが変化するならば、その他の方向づけのうちの一つあるいはそれ以上に変化が生じるか

らである。システムの行動に影響を与える二つの変数とは、重要性 (importance) と対象の関連性 (object relevance) である。重要性とは、対象に対する情動的な方向づけと関連があり、肯定的あるいは否定的態度の程度によって操作される。「対象の関連性とは、コミュニケーターの一人によって判断されるような特殊なコミュニケーションの対象についての二人あるいはそれ以上のコミュニケーターの共同の依存程度と関係する。」(57, P P. 392-393) 「それは (対象の重要性) 特殊な対象や特殊な他の人に向って同時的方向づけを個人に起こさせる力の強さである。」(57, P. 393) 対象の重要性は、その対象が他の人と関係する緊密さと頻度に関するステイトメントによって操作される。

方向づけのシステムは、バランスあるいは均衡から出てきたものである。シンメトリーに向う緊張、バランスの回復に向う緊張は方向づけのシステムより生じる。システムがより多い緊張状態から、より少ない緊張へと向うための手段の一つはコミュニケーションであり、シンボルの送信と受信である。

Newcomb によると、X に対する A と B との方向づけが異なっている時には、B に対する A の肯定的な魅力が大きければ大きいほど緊張は大きくなる。さらに、異なった A と B との間の方向づけと B に対する A の肯定的な魅力が与えられた時には、X の重要性、X についての対象の関連性、X に対する A と B との方向づけのコミットメントの程度とともに緊張は増加する。緊張は、A と B との間の肯定的な魅力と関連する方向づけの食い違いについての単なる不確かさによってもまた生み出されるかもしれない。

一般的には、Newcomb 57) によると、緊張は五つの変数とともに変化する。

- (1) 方向づけの食い違いの程度
- (2) 魅力のサインと程度
- (3) X の重要性
- (4) コミットメントの程度あるいは方向づけの重要性
- (5) 対象の関連性

Newcomb 57) は、構成概念の定義を行なって後に、構成概念間の主な相互関係についての仮説を提出する。その仮説はつぎの五つに分けられる。

1. コミュニケーション対象、コミュニケーターに対する個人の方向づけや、知覚されたコミュニケーターの方向づけについてのある組合せ、つまり方向づけシステムのある状態において緊張が生じる。
2. コミュニケーション行動とは、このシステムの緊張に対して、それを解消しようとする習得的反応である。
3. コミュニケーション行動によって、緊張を解消されるような変化が方向づけのシステム内に生じる。
4. システムが緊張している条件下で、外的なコミュニケーション行動以外の緊張解消が要素の方向づけ、あるいは判断された方向づけのうちの一つまたはそれ以上を変化させることにより生じるかもしれない。すなわちシステムのバランスが実際の情報交換による緊張解消の代償や補足として、自閉的緊張解消 (autistic strain reduction) によってもたらされるかもしれない。

なお、1 から 4 までの四つの関係を Newcomb 57) はつぎのように図示している。

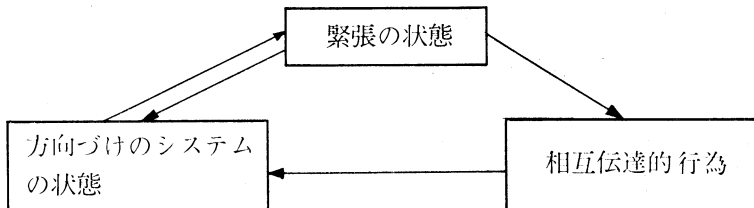


図 3 (P. 397)

5. システム内の変化は緊張に等しい影響を与える。そしてコミュニケーションおよび自閉作用

(autism) の結果、緊張はつぎのような変化を通じて解消される。

- (1) 魅力の強さの減少
- (2) 対象の関連性の減少
- (3) 知覚された他者の対象関連性の減少
- (4) コミュニケーションの対象の重要性の減少
- (5) 知覚された他者におけるコミュニケーションの対象の重要性の減少
- (6) 自分自身の態度についての情動的、認知的構造の変化、つまり他者の知覚された態度との類似性を増加させること。
- (7) 他者の知覚された態度の変化。

Newcomb はこのようにして構成概念間の相互関係についての複雑なシステムについて考察する。この過程を通じて、個人は緊張解消をはかりまた全体のシステムの変化をもたらし、均衡を保持するのである。

Newcomb の理論と関連して態度の類似性と魅力 (attraction) の問題についての調査研究は非常に多い。(Backman と Secord, 10), Burdick と Burnes, 11), Festinger, 19), 20), Izard, 37), Levinger と Breedlove, 47), Steiner, 86), など) 要するにこれらの論文は、一致が増加するとともに魅力が増し、魅力が増加するとともに一致が増す、ということを示唆している。

1-3 Festinger の認知的不協和理論

Festinger²¹⁾ の認知的不協和理論は、態度変容理論の領域の中で、最も人気のある理論の一つである。単一の理論で、恐らくこれほどの検証実験が行なわれている理論は、ほとんどないであろう。この論文では、認知的不協和理論に関する検証文献は一切割愛し、Festinger の理論的立場²¹⁾ を略述するとどめたい。

(認知的要素)

認知的不協和理論の基礎的な単位は、認知的要素である。Festinger によると、認知的要素とは種々の対象、事実、環境、行動などに関する「知識」であると述べる。「知識」という言葉の中には、信念、意見、態度をも含むのでそれはむしろ包括的な概念なのである。

(認知的要素間の関係)

二つの認知的要素は、無関連な関係あるいは関連のある関係があるかもしれない。もし認知的要

素が互いに完全に無関係ならば、それらの間の関係は無関連 (irrelevance) の一つである。たいていの人々にとっては、二週間前に雨が降ったという知識は、ある日に一時間郵便が遅れたという知識とは無関連である。もしある人が、これら二つの事柄と関連する情報を持っていたならば、それらの間の関係は、もちろん、その人間にとって関連のうちの一つである。

関連のある関係は、不協和と協和の二つの型に分類される。Festinger²¹⁾ によると「この二つの要素だけを考えて、一つの要素の逆の面が他の要素から帰結されるならば、これら二つの要素は不協和な関係にある。」(末永監訳²¹⁾ P: 13) たとえば、もし借金をしている人が車を買ったとしたら、二つの認知的要素間の関係は不協和であろう。つまり車を買わないということは、借金をしているということから帰結される。Festinger はさらに、上述した不協和の定義における「帰結する」(follow from) という言葉が異なった意味を持つ、と述べる。つまり、ある認知的要素の面が、他の要素から、厳密に論理的に、帰結する故に、不協和が生じるかもしれない。ある人の現在の行動の逆の面が、文化的慣習から帰結される故に、あるいは、ある人の現在の経験の逆の面が、過去の経験に基づく期待から帰結する故に、不協和が生じるかもしれない。「帰結する」という言葉は、明らかに、かなりルーズに使用されている。

協和的な関係とは、ある認知的要素がもう一つの認知的要素から帰結する、ということの意味している。

(不協和の大きさ)

認知的要素間の不協和の大きさは、要素の重要性と関連する要素が不協和である割合との両方に依存する。不協和な関係にある認知的要素の重要性が大きければ大きいほど、不協和の大きさはより大きくなる。たとえば、必要としていない乞食に10セント与えることは、わずかな不協和しか生じないであろう。なぜなら重要性はほとんど認知的要素に加えられていないからである。一方では重要な試験に対して十分に勉強していない場合には、より多くの不協和を生ぜしめるであろう。また不協和な関係にある認知的要素の割合の増加と

ともに増える。たとえば、たばこを吸う人に禁煙するような理由を知らしめれば知らしめるほど、絶えずたばこを吸うことによって生み出される不協和はより大きくなる。

(不協和の低減)

認知的不一致性は、不協和を低減するような圧力を生み出す。この圧力は不協和の大きさの関数である。不協和低減はつぎの三つのうちのどれかにより達成される。

1. 行動の認知的要素を変化させること。
2. 環境の認知的要素を変化させること。
3. 新しい認知的要素を付加すること。

(不協和の大きさの限界)

Festinger²¹⁾ はつぎのように述べる。

「任意の二つの要素の間に存在しうる最大の不協和は、変化に対する抵抗の少ない方の要素が示す抵抗の総量に等しい。不協和の大きさはこの量を越えることができない。というのは、最大の不協和が生ずるその点において抵抗の少ない方の要素は変化し、かくして不協和は除去されるであろうから。」(末永監訳²¹⁾, P. 28)

1-4 Abelson と Rosenberg

Abelson と Rosenberg²²⁾, Abelson¹⁾, Rosenberg と Abelson⁷⁷⁾ は、バランス理論をより緻密に、分子的に扱いつつ理論的な展開をはかっている。特に、多要素の認知をマトリックスで表わし、数学的な解法に基づきインバランス回復の方法を示している点は興味深い。

(認知的要素)

Abelson と Rosenberg²²⁾ によると、認知的構造の要素的単位を「具体的、抽象的な物についての概念作用」と考える。そして彼らは要素を三つに分類する。

1. actors: 自分自身, 他人, 集団
2. means: 行動, 手段的反応
3. ends: 結果, 価値

(認知的関係)

認知的要素間の関係は、肯定的 (positive), 否定的 (negative), 無 (nul), アンビバレント (ambivalent) というように四つに分類される。それらは, p, n, o, a という記号で表わされる。肯定的な認知的関係の例としては、「好む」

「使う」、「所有する」、「助ける」「一致する」などがあげられる。否定的な認知的関係として、「嫌う」、「反対する」、「妨げる」、「矛盾している」などがあげられる。無の認知的関係は、「無関心である」、「責任がない」、「興味を持っていない」、「無関係である」などの例で示される。アンビバレントな関係としては、肯定的な関係と否定的な関係とが結合したものがあげられる。

(認知的単位)

認知的単位とは、関係によって結びつけられた一対の認知的要素である。つまり、態度的認知についての基本的な「文章」は、ArB という形をとる。そこではAとBとは要素であり、rは関係である。Abelson と Rosenberg²²⁾ はつぎのような例をあげて説明する。「ナセル(A)は、スエズのすべての通行税(B)はエジプト(C)のものである(P)と主張する(P)。」

記号ではこの文章は、Ap(BpC)と表わされる。しかし、(BpC)を新しい要素Dとして見ると、上の文章はApDと変形される。このようにして、多くの文章は、基本的には、ApB, AnB, AoB, AaB という四つのカテゴリーに分類される。

(conceptual arena)

conceptual arena は、一定の事柄、態度対象と現象的に関連するすべての認知的要素すなわち actors, ends, means, そして関係のそれぞれから成っている。たとえば、「Yale 大学における honor system (監督なしで試験を行なう自治制度)」や「ヴェトナム戦争のエスカレーション」は conceptual arena である。conceptual arena の基本的な認知的、態度的要素を分析するためのデータは、被験者にそのトピックについて考えさせ、そして頭に浮かんできたことを言葉や短い句で書き留めてもらうことにより得られる。マトリックスの形で表わされる conceptual arena は、このような方法で得られる。マトリックスの行と列とがそれぞれの認知的要素を表わし、cell がすべての可能な要素の対間の関係を示している。Abelson と Rosenberg²²⁾ は、このマトリックスを「構造マトリックス」と呼び、例として、「Yale 大学で honor system を持つこと」というトピッ

クに関連して、つぎのような六つの要素に分類する。

- A—自己（被験者自身）
- B—正直な生徒
- C—カンニング者を報告すること
- D—信じてもらいたいという感情
- E—少数の者によってカンニングが行なわれること
- F— honor system

構造マトリックスは、それぞれの要素間の関係を単純化するために用いられる。上に述べられた六つの要素について、ある個人の構造マトリックスはつぎのように示される。

| | A | B | C | D | E | F |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A | p | p | n | p | n | o |
| B | p | o | n | p | o | p |
| C | n | n | p | o | n | p |
| D | p | p | o | p | o | p |
| E | n | o | n | o | p | n |
| F | o | p | p | p | n | p |

(心情的論理, サイコ・ロジック)

ある個人が、その人の conceptual arena 中の認知的要素について考えるように刺激された時にはいつでも、心情的論理というルールによって導かれる。これらのルールによって、個人は古い二つの文章を共通な要素と結びつけ、新しい記号的文章を発見する。心情的論理のルールとはつぎのようなものである。(Abelson と Rosenberg², P. 4)

1. ApB と BpC は ApC を含む。
2. ApB と BnC は AnC を含む。
3. AnB と BnC は ApC を含む。
4. AoB と BrC は r に関係なく A と C との間には関係がないことを意味する。
5. もし ApC と AnC の両方が含まれるならば、あるいはもし一つが最初に含まれて、そしてもう一つが含まれるならば、AaC である。これはアンビバレントな関係の定義である。

6. AaC と CpD は AaD を含む。
7. AaC と CnD は AaD を含む。
8. AaC と CaD は AaD を含む。

上述したそれぞれのルールに関して注意すべきことは、ArB=BrA というシメトリカルな仮定に立っているということである。アンビバレントな関係や無関係を含むルール以外は、理論的な含蓄はバランス理論と同じである。Insko³⁶⁾によると、「バランス理論においては、奇数の否定的関係を含む三者関係はバランスではない。最初の三つのルールにおいては、含まれた関係(implied relation)とは、常に、奇数の否定的関係を生み出さない関係である。」と述べる。(P. 182)

Abelson と Rosenberg は、上述したルールは心情的論理であって、論理ではないと指摘する。Osgood⁶⁰⁾は、こうしたサイコ・ロジックの考え方が現在の東西緊張関係を規定する心理的な一要因となっていると指摘している。たとえば Osgood⁶⁰⁾はつぎのような例をあげる。「普通の日常生活にあっては、もし友人がX君を嫌いだといひ、その結果、我々もX君を何がしか嫌いになり始めたとしても、このX君に自分自身で会うことによって、X君に対する意見を修正する余地が残されています。ところが、こうしたことを国際事情に当てはめようとしても、我々のほとんどすべての者にとって、それはとうてい可能なことではありません。……そして、その結果、インドの首相がインドの中立を主張する時、多くの人は彼が共産主義の支持者であるに違いないと信ずるようになってしまうのです。(つまり、これは「我々の味方でないならば、我々の敵に違いない」という考え方です。)」(南・田中訳P. 42)このようにサイコ・ロジックは論理的な一貫性かわりに感情的な一貫性が生じる作用のことである。また Osgood⁶⁰⁾の言葉を借りるなら、「できるだけ単純で安定した世界観を持ち続けようとして、複雑な世界をこうした非常に単純化した型の中で当てはめようと常に努力しています。」(南・田中訳, P. 41)

(インバランスの解消)

conceptual arena 内の非一貫性は、思考を通じてのみ発見される。いったん非一貫性が発見されたならば、そのインバランスを解消するためのい

くらかの試みがなされる。インバランスの解消は三つの方法でなされうる。

1. 一つあるいはそれ以上の関係を変える。
2. 一つあるいはそれ以上の要素を再定義したり、分化、分離させたりする。
3. 思考を停止する。

たとえば、Yale 大学で女友達を持ちたいと思っている学生が、同時に、良い成績を取りたいと望んでいる。しかし Yale 大学で女友達を持つことは、良い成績を取るのに妨げになると信じている学生の例を考えてみよう。そのインバランスはその学生が Yale 大学で女友達を持ちたくない、あるいは、良い成績を取りたくない、あるいは、Yale 大学で女友達を持つと良い成績を取る妨げになるということ信じたくなる、というように三つの関係のうちの一つを変えることにより解消される。また、「良い成績を取ることを「Cを取ることに」と「Aを取ることに」に分化することによって、インバランスを解消できる。もし良い成績を取ることは、Cの成績を取ることであるということの意味するならば、不一致はないわけである。最後に、単にそうしたことを考えることを停止することによりインバランスは解決される。

このような例においては、一つだけの認知的関係を変化させることによりインバランスの解消がなされる。しかしながら、多要素の conceptual arena においては、多くの認知的関係を変化させることがインバランスの解決のためには必要である。こうした場合のことを考慮して Abelson と Rosenberg は構造マトリックス (structure matrix) という概念を提出する。そして、バランスを回復する際には、すべての関係は同じように変化することに抵抗すると仮定する。そこで Abelson と Rosenberg は、関係の変化数が最も少なくすむような仕方でもインバランスが回復されるであろう、と推論する。彼らは、数学理論の定理から生じた一定のルールを使用することにより、最も変化が少なくすむバランス回復作用を予測する。

その予測は、conceptual arena についてのマトリックスに基づいてなされる。

Abelson¹⁾ は、別の論文でインバランスの解消つまり信念ジレンマの解消モデルについて考察している。彼は、二つの要素と一つの関係というような簡単なモデルから分析を始める。基本的には六つの可能な場合を考慮して、つぎのように図示する。

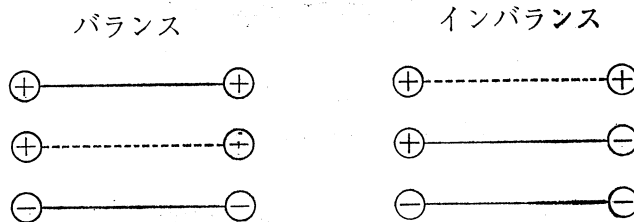


図 4 二つの要素と一つの関係を持つ認知構造。
実線は結合的(肯定的)関係を、点線は分離的(否定的)関係を意味する。

Abelson¹⁾ は、インバランスの解決について四つのモデルを提出する。

1. denial (否定)
2. bolstering (支えること)
3. differentiation (分化)
4. transcendence (超越)

最初に、denial とは、一つあるいはそれ以上の認知的要素を変えることである。denial による解

決を Yale 大学の学生の例で示すなら、Yale 大学で女友達を持つことは、良い成績を取る妨げになる、ということ信じなければいいわけである。第二に、bolstering と呼ばれるメカニズムとは、不一致で認知的な単位に付加的な一致する関係を加えることにより相対的にインバランスを最少にすることである。(図5)このメカニズムは Festinger の認知的不協和理論で重要な役割を果

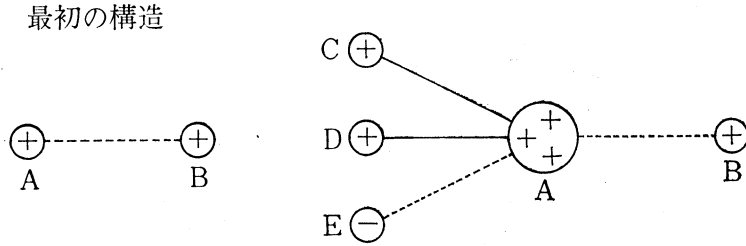


図 5

たす。例で示すなら、肺ガンを心配しながらたばこを吸っている人は、絶えず自分自身に喫煙は非常に楽しく、精神の安定にも良く、社会的にも必要であると言いきかせているかもしれない。つぎに differentiation とは、認知的要素が強い分離の関係でもって二つの部分に分けられることを意味する。たとえば、水爆の実験には肯定的な価値

を持っているけれど、大気汚染に対しては否定的な価値を持っているとすると、これら二つの認知的対象が結合的に関連づけられたならば、この二者関係はインバランスである。そこで、「空気を汚す水爆」と「空気を汚さない水爆」というように分化作用が起こり、バランスが回復されるかもしれない。

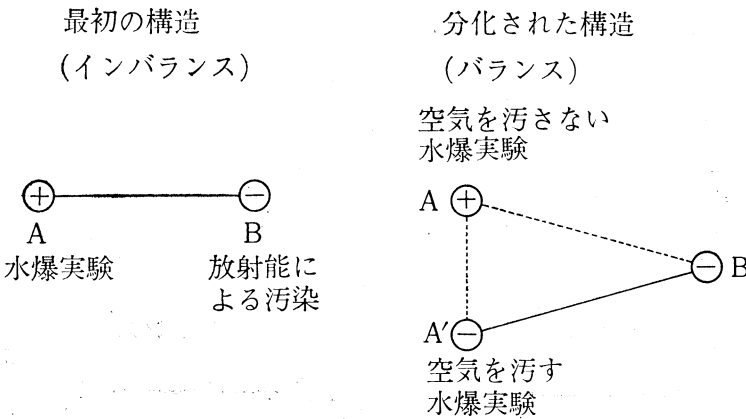


図 6 認知的バランスを回復する分化のメカニズム

最後に、transcendence のメカニズムとは、ある意味では、differentiation のメカニズムの反面である。図7に示されているように、要素は分離される代わりに、superordinate なレベルで組織されるより大きな単位となって結び合わされる。たとえば、科学と宗教との不一致について言うならば、科学と宗教の両者共、より充実した生活を成就し、全人類をより深く理解するためには必要であると結論することにより transcendence がなされるかもしれない。

Abelson はさらに、信念ジレンマの解決方法には、denial, bolstering, denial (二番目), differentiation, transcendence という順序でヒエラ

ルヒーが存在する、と述べる。解決の試みのヒエラルヒーは、バランス回復の相対的な容易さに基づいている。もしインバランスが、自分の持っている認知と不一致な説得的コミュニケーションを通じて起こったならば、説得的コミュニケーションの否定が最も起こりやすい。もしdenial が失敗したならば、bolstering が試みられ、さらに熟考した後に denial あるいは一つ以上の関係を変化させる試みがなされるであろう。しかし、denial や bolstering は differentiation や transcendence のメカニズムより簡単であるけれど、インバランスを低減する方法としては必ずしも効果的なものではない。認知的要素を分離する differentiation

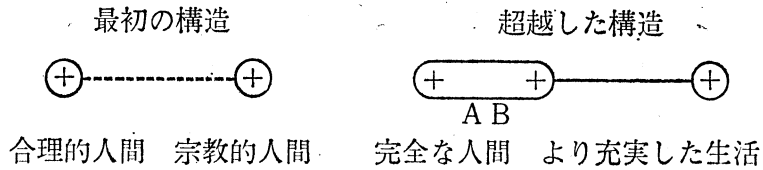


図 7

は、知的な能力や融通性を必要とするので（特に認知的対象に対して強い感情がある時には）denial や bolstering に比べて難しい。transcendence は解決の最後の手段である。なぜなら、有力な superordinate 構造を作り出すことは非常に難しいからである。

Rosenberg と Abelson ⁷⁷⁾ は、インバランス解消の際には、人間は必要な変化の数を最も少なくてすむような方法すなわち最少の労苦原理に従って行動する、という仮説を検証した。さらに実験の結果によるとつぎのようなことが判明した。すなわち、認知的な食い違いを解消する際には、被験者はバランスや一貫性の成就をめざすだけでなく、またポテンシャルな利益を最大にし、ポテンシャルな損失を最少にするような解決を見つけようと努力する。要するに認知的バランスの過程においても、欲求充足が重要な役割を果たすことがわかった。

さらに Rosenberg ⁷⁶⁾ は、ある仮設的な状況の非論理的な性質によって悩まされる感情に関して二つの変数（快樂の一禁欲の、個人的な—一般的）の効果について研究している。

1-5 Rosenberg の感情—認知の一貫性理論 (態度の定義)

Rosenberg ⁷²⁾ は、最初、態度を「ある対象に対する比較的安定した感情的反応」というふうに定義していた。しかしながら彼は、ある対象に対する感情は認知や信念と密接な関係を持っていると考えているので、後には態度とは、感情的要素、認知的要素、行動的要素から成り立っていると考えるようになった。Rosenberg と Hovland ⁷⁸⁾ はこれをつぎのように図式化している (P. 3)

Rosenberg の理論のユニークな点とは、態度対象が他の感情的意味ある対象と道具的な (instrumental) な仕方に関連しているということである。たとえば、安保条約に対して肯定的な態度を持っているということは、その対象つまり安保条約に対して肯定的な感情を持っていると同時に、極東情勢の安全保障やアメリカとの友好関係に導くといった信念を含んでいる。このように態度と信念とは互いにダイナミックな関連を持っており、システムのある部分の変化は、他の部分の変化を生み出すであろうと Rosenberg は考える。

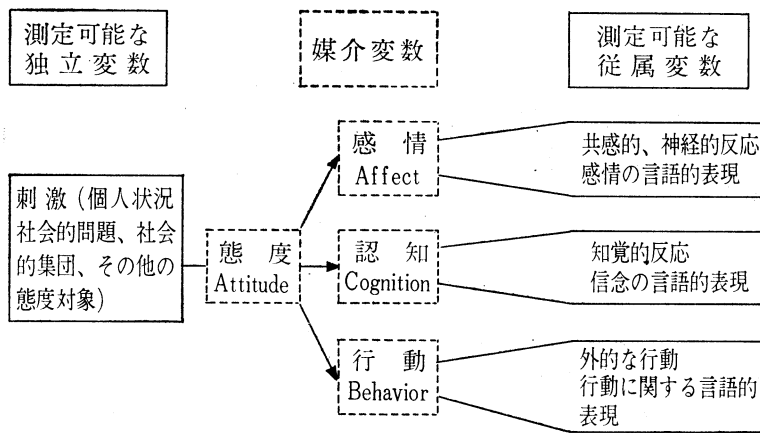


図 8 態度の図式的概念

(態度構造)

Rosenberg (73) 74) 75) によると、態度構造内の感情的要素の変化は、認知的要素の変化をもたらす。そして逆もまた同様である。たとえば、安保条約に対する態度を肯定的なものから否定的なものに変えるなら、安保条約はアメリカとの友好関係に導くという信念を変化させる傾向がある。あるいはその逆の場合も考えられる。このように Rosenberg によると、態度構造内の一貫性はつぎのような予測を可能にする。すなわち、態度対象に対する賛成—反対の感情についての予測は、種々の対象の重要性に基づく価値と、種々の対象と態度対象との間に知覚された道具的關係とに基づいてなされる。この予測は、態度と相関する指標を計算することによってなされる。その指標計算の手続きはつぎのような順序でなされる。

1. 被験者は、種々の対象についての感情的重要性に基づく価値を評定する。
2. 被験者は、それぞれの対象についての感情的重要性が態度対象と道具的に関連していると知覚した程度を評定する。
3. それぞれの対象の感情的重要性に関する、被験者の価値の評定値とそれぞれ同じ対象についての道具性の評定値とが掛け合わされる。
4. 価値評価と道具性評価との積が統計される。

(態度変容)

Rosenberg 75) によると、態度変容についての構造的理論はつぎのような基本的命題によって打ち立てられた。(P. 322)

「1. 態度の感情的要素と認知的要素とが互いに一致している時には、その態度は安定した状態にある。

2. これらの要素が相互に不一致である時にはそのような不一致について個人の「忍耐限界 (tolerance limit)」、を超える程度にまでその態度は不安定な状態にある。

3. そのような不安定な状態においては、三つの可能な結果のうちの一つが起こるまで、態度は再組織化の活動に耐えるであろう。三つの結果とは、

(a) コミュニケーションの拒否、あるいは、感情と認知との間に最初に不一致を引き起こし、態度を不安定なものにした他の力の拒否。つまり、最初の安定した、一貫性のある態度への回復。

(b) 相互に不一致な感情的要素と認知的要素とを分離することにより態度の「分裂」、をはかる。

(c) 最初に不一致性を生じさせた変化に適合すること。その結果、その変化と一致した新しい態度が安定化される。つまり態度変容。」

このような Rosenberg の出発点はホメオスタティック (homeostatic) な仮定に基づいている。

わが国では原岡 (31) 32) が構造的均衡仮定に立って、態度変容の過程とその段階について議論している。原岡 32) によれば、態度変容過程は、(1)抵抗の段階(2)変容準備段階、(3)不安定不均衡段階、(4)構造的再体制化の段階、(5)安定強化の段階の五つに分けて考察されている。

Rosenberg の態度構造理論の検証実験として、Rosenberg 71, 72) 自身のものがある。Rosenberg にアイデアを与えた研究として、Woodruff と DiVesta 94), Cartwright 14), Smith 84) などがある。これらはいずれも態度と価値との関連によって一貫性をとらえている。

一方態度変容理論に関する研究としては、Carlson 13), DiVesta と Merwin 16) や Rosenberg 73, 75) などの検証実験があげられる。